

# ヨシフ・ブロツキイ研究の現在

## ——ロシア編——

竹内 恵子

### はじめに

このエッセイは、現在ロシア連邦内において、ノーベル賞詩人ヨシフ・ブロツキイ（1940年ソビエト連邦レニングラード生まれ、1996年アメリカ合衆国ニューヨークにて逝去）がどのように受容・研究され、その資料が現在どのように保管されているかといった情報をまとめたものである。

筆者は2013年9月から2016年9月にかけて3回にわたってロシアに渡航し、現地におけるブロツキイ研究全般の実態を調査した。<sup>1</sup> その過程で、これまで日本では全く知られていなかった数々のブロツキイ情報を入手することができた。こういった情報は時とともに古くなることは承知しているが、なかには有益な内容もあると思われるので、備忘録もかねてここに記しておく。本邦におけるブロツキイ研究の一助となれば幸いである。<sup>2</sup>

### 1. アーカイヴ調査（ロシア国立図書館）

現在、ロシアにおけるブロツキイのアーカイヴは、サンクトペテルブルグのロシア国立図書館（Российская национальная библиотека, 以下РНБと略す）の本館の手稿部（Отдел рукописей）にある。<sup>3</sup> アーカイヴ番号は、「1333」である。

ただし、ブロツキイのアーカイヴに関する目録は2つあるので注意しなくてはならない。古い目録はB. ペトロワ氏（この人物については詳細不明）が1994年に編纂したもので、元々のアーカイヴ番号である「1180」という数字が目録に残っている。これは、ワシ

<sup>1</sup> 2013年9月および2014年3月の2回の渡航は、科学研究費助成金若手研究（B）（課題番号：23720176、研究課題名「亡命ロシア文学におけるアメリカ文化受容の諸相」）によるものである。

<sup>2</sup> この報告に記載された内容は、2016年11月現在のものであることをお断りしておく。なお、本文中の写真はすべて筆者によるものである。

<sup>3</sup> モスクワのロシア国立図書館（Российская государственная библиотека, 以下РГБと略す）も訪れる価値はある。ロシア全土で提出されたブロツキイに関する学位論文を入手することが可能だからだ。しかし、ブロツキイ自身の原稿などの資料はないため、ブロツキイ研究の中心はやはりペテルブルグである。

リエフスキ島のロストラの灯台が描かれた紫色のファイルである。このファイルによると、アーカイヴに収められているプロツキイの原稿は、「1991年にЯ.А.ゴルジン氏により手稿部に持ち込まれた」という。<sup>4</sup> 詳しい経緯は第2章で述べるが、1972年のプロツキイのソ連出国後にレニングラードに残っていた彼の両親が1983～1984年に相次いで亡くなった後、友人のゴルジン氏がプロツキイの原稿等をひそかに保管していたことが察せられる。

ペトロワ氏による目録はかなり大雑把で不便なものなので、2004年8月16日から2005年1月1日まで4カ月ほどかけて、アレクセイ・グリーンバウム氏が新しい目録を作成した。<sup>5</sup> これは、宮殿広場の参謀本部のアーチが描かれた黒いファイルであり、目録の改変にもなってアーカイヴ番号も「1180」から「1333」に改められた。現在は主に、このグリーンバウム目録を使用して資料を請求することになっている。

РНБの手稿部ではこういった目録をネット上で公開するどころか、部内においてさえもコピーを取ったり写真撮影をしたりすることを禁じている。パソコンを持ち込んでいる人もなく、作業は主に手書きによる抜き書きが基本である（目録のネット公開やパソコン持ち込みが当たり前のアメリカとは、まさに雲泥の差である）。したがって、現地に行くまでどのような資料が保管されているのかわからないうえに、部内で調査を始めてからかなり膨大に作業時間がかかることを覚悟しなくてはならない。今回、筆者はグリーンバウム目録の目次を手書きで書き写してきたので、資料収集の参考にして頂きたい。なお、末尾の数字は資料請求番号である。

## 目次

### I. 伝記的資料：1－53

1. 個人的書類（身分証明書を含む）：1－28
2. 「プロツキイ事件」：29－38
3. 労働証明書：39－40
4. 資産証明書：41－42
5. ヨシフ・プロツキイに関する書類：43－53

---

<sup>4</sup> Яков Аркадьевич Гордин（1935年レニングラード生まれ～）はロシアの作家で、軍隊を除隊した1957年にレニングラード大学文学部に入学し文学活動に従事する。プロツキイと親交を結んだのも同じ1957年頃である（ゴルジン氏は元々詩人として活動していた）。

<sup>5</sup> アレクセイ・グリーンバウム（Алексей Гринбаум、父称不明）氏はパリ在住で、ニューヨークに本部がある「プロツキイ財団（The Estate of Joseph Brodsky、ロシア語表記は Фонд по управлению наследственным имуществом Иосифа Бродского、以下「財団」と略す）」の、ロシアおよびヨーロッパ圏の担当者である。なお、財団代表でアメリカ担当者が、プロツキイの1986年からの秘書であり彼の遺言執行者であるアン・シェルバーク（Ann Kjellberg、ロシア語表記は Энн Шерберг）氏である。

II. 回想録用資料：54－58

III. 草稿：59－437

1. 詩, 連作, 詩集：59－81
2. 個々の詩作品：82－360
  - 2a. 他言語への翻訳作品：361－363
3. 翻訳作品：364－404
4. 短編：405－412
5. 劇作品：413－417
6. 論文, 評論：418－427
7. 多様なメモ類：428－435
8. 講演原稿：436－437

IV. 書簡：438－669

1. ヨシフ・プロツキイの書簡：438－457
2. ヨシフ・プロツキイ宛ての書簡：458－669
  - 2a. 諸外国との文通：615－669

V. ビジュアル資料：670－680

1. 絵：670－671
2. 写真：672－680

VI. А.И. プロツキイと М.М. ヴォリペルト [筆者注：プロツキイの両親] に関する資料：681－709

1. 個人的書類 (身分証明書を含む)：681
2. 書簡：682－706
3. ビジュアル資料：707－709

VII. その他の人物の資料：710－830

1. 文学作品：710－785
  - 1a. 詩：710－754
  - 1б. 散文：755－762
  - 1в. 論文, 評論：763－772
  - 1г. 翻訳作品：773－785
  - 1д. 音楽的資料：786
2. 書簡：787－800
3. ビジュアル資料：801－830
  - 3a. 絵：801
  - 3б. 写真：802－830

VIII. アーカイヴに後年追加された資料：831-832

以上が、現在プロツキイのアーカイヴに収められている資料の内訳である。それにしても、ゴルジン氏はよくこれだけ大量の資料を保管していたものだ（おそらく協力者が複数いたものと考えられる）。ソ連時代には亡命詩人プロツキイの存在は公式には抹消されていたのだから、ゴルジン氏はソ連崩壊を待ってようやく国立図書館にこれらの資料を寄贈したのだろう（なお、このアーカイヴにおける「書簡」は、「財団」の許可を得ない限り閲覧することはできない。ペテルブルグにはプロツキイの親類縁者がまだ存命なので、プライバシーを保護するためだろう。なぜなら、アメリカのイエール大学に保管してあるプロツキイのアーカイヴにおける「書簡」は自由に閲覧できるのだから）。

さすがに全ての資料をチェックしたわけではないものの、年代がさほど古いわけではないので、全般的に保管状態は悪くない。ソ連時代の製品の質の悪さを証明するかのようになり、薄っぺらなタイプ用紙はかなり黄ばんでいるし、草稿だけあってコーヒーと思われる染みのようなものも付いているが、それも当時のプロツキイの実生活が生々しく感じとれる貴重なものである。

ただし、彼の原稿調査には大きな問題点がある。それは、プロツキイの手書き文字がほとんど判読できないということだ（のちに元秘書のシェルバーク氏に聞いたことだが、イタリア出身であるプロツキイの未亡人も読めないのだという）。やはりネイティブのロシア人でないと手書き原稿の解読は困難だろう。しかし、有難いことにかなり多くの原稿がタイプライター打ちなので、アーカイヴ調査にはそれなりの意義がある。機会があればペテルブルグに長期滞在して、本格的な調査を行いたいと考えている。

本稿は個々の資料について述べる場ではないため、しかるべき論文などを発表する際に資料調査の結果を公開したいが、今回のアーカイヴ調査で個人的に最も収穫があった資料の一つだと思うのは、資料請求番号 27 番のプロツキイの「蔵書目録（70 年代）」である。これは、質素な茶色い厚紙の図書文献カードにペンで書かれたもので（カードの束は麻ひもで縛ってある）、全 97 枚ある。亡命直前のプロツキイの書棚の中身がわかって面白い。手書き文字ではあるが、本人が記録用に清書したものらしく、比較的読みやすい字で書名が一冊一冊ていねいに書かれていた。

それを見ると、驚くべきことにプロツキイは 20 世紀の英米の詩集をかなり所蔵していたのである（書名の大部分は詩集である）。例えば、ウィリアム・カーロス・ウィリアムズ、シオドア・レトキー、シルヴィア・プラス、テッド・ヒューズ、リチャード・ウィルバー、マーク・ストランド、アレン・ギンズバーク、エズラ・パウンド、ロバート・ローエル等である。プロツキイ作品に多大な影響を与えたオーデンやエリオットは言うまでもない。後述する「プロツキイのアメリカ書齋」のスタッフによれば、こういった図書は外

国人研究者がソ連を訪問する際にひそかに持ち込んできたものが大半だというが、予想以上の量だった。レニングラード時代のプロツキイはこういった西側の詩人の作品を読んで「勉強」していたのだろうか。そして、これらプロツキイの蔵書は既に散逸してしまったのだろうか。こういった疑問から、筆者は次に蔵書の行方について調査を行うことにした。

## 2. アフマートワ博物館

大量の蔵書を含むプロツキイの遺品を発見したのは、「アンナ・アフマートワ博物館 Музей Анны Ахматовой」内だった。この博物館はペテルブルグのリテイヌイ大通り 53 番地であって、プロツキイの実家があった建物ともほど近い（徒歩 10 分くらいだろう）。

1961 年、21 歳の青年プロツキイは、当時既に 72 歳になっていた詩人アンナ・アフマートワと親交を結んだ。プロツキイの友人アナトーリイ・ナイマンがアフマートワの私設秘書を務めていたからである。半世紀以上も年上でプロツキイとは全く異なる作風のアフマートワだったが（そもそもプロツキイはツヴェターエワの作品の方を評価していたのだ）、なぜかプロツキイを息子のように可愛がった（実の息子レフ・グミリョフとうまくいっていなかったせいもあるだろう）。そして、1966 年にアフマートワが亡くなるまで二人は親しく交際していた。

その後、周知の通りプロツキイは 1972 年にソ連国外へ強制退去させられ、母マリアが息子と会えないまま 1983 年に肝臓ガンにより無念の死を遂げ、翌 1984 年には父アレクサンドルが心臓発作で急死する。その後、プロツキイの実家があるリテイヌイ大通り 24 番地の「ムルジ邸」（次章で詳述する）から、プロツキイの友人ゴルジン氏らが中心となって原稿や遺品をひそかに運び出してどこかに保管していたのである。ソ連時代に亡命詩人プロツキイに関わることは親戚でもタブーだったのだから、これはかなり勇気ある行為だといえるだろう。

「アフマートワ博物館」は、フォンタンカ運河沿いのシェレメチェフ宮殿の中にある。したがって、同博物館は「噴水館 Фонтанный дом」とも呼ばれる（フォンタンカ運河という名称は、「夏の園」にある噴水フオンタンに由来する）。フォンタンカ河岸通り側の入り口から入ると楽器博物館になっているが、アフマートワ博物館は裏のリテイヌイ大通り側の入り口（中庭に入るための裏口）から入らなくてはならない。アフマートワはここに 1920 年代なかばから、3 番目の夫ニコライ・プニンと、プニンの前妻を含む家族らとここに住んでいた。美術評論家のプニンは「ロシア美術館」に勤めていたが、1938 年に粛清されてしまう。また同年息子レフ・グミリョフが逮捕され、白海運河建設などに駆り出される。アフマートワは 1941 年から戦争を避けて各地に疎開していたが、レニングラードに帰還した

後の 1953 年にこのシェレメチェフ宮殿を永久に去る。とはいえ、ここで「レクイエム」などの主要な作品が執筆されたこともあり、この宮殿こそアフマトワの博物館にふさわしいと考えられたのだろう。

やがてアフマトワ生誕 100 周年を記念して、ペレストロイカ時代の 1989 年によりやく博物館が開館した。ゴルジン氏はこの頃から「アフマトワ博物館」にプロツキイの遺品を徐々に持ち込み始めたのだという。プロツキイがアフマトワと交際していた時期には、彼女は既にここには住んでいなかったわけだが、同じリテイヌイ大通りでもあるし、今後「ムルジ邸」にもし「プロツキイ博物館」が開館するような運びになったら何かと便利だと考えたのだろう（「プロツキイ博物館」開設の可能性については後述する）。<sup>6</sup>

一方、プロツキイ自身は 1996 年に心臓発作によりアメリカで客死した。その後、未亡人マリア・ソツァーニ＝プロツキイ氏および「プロツキイ財団」が中心になって、アメリカ時代のプロツキイの遺品が 2003 年より少しずつ「アフマトワ博物館」に寄贈されていくことになる。もちろん、将来「プロツキイ博物館」がペテルブルグにできることを想定したものだ。なお、これらの遺品は主にマサチューセッツ州サウスハドレーの別宅にあったものである。プロツキイは 1996 年 1 月 28 日にニューヨークのブルックリンハイツにあるピアポイント通り 22 番地（Pierrepont Street 22）の集合住宅で急死したが（この自宅には遺族が 2014 年まで住んでいた）、プロツキイはマサチューセッツ州のマウントホリヨーク大学の教員を務めていたので、1981 年よりサウスハドレーにも一軒家を所有し、ニューヨークとの間を自家用車で往復するのが常だった。

さて、大量にプロツキイの遺品を所蔵することになった「アフマトワ博物館」だが、いつまでも肝心の「プロツキイ博物館」ができないこともあってか、「アフマトワ博物館」内に、主にプロツキイのアメリカ時代の遺品を展示するスペースを作ることになる。それが同館 1 階の「プロツキイのアメリカ書斎 Американский кабинет Иосифа Бродского」であり、2005 年 5 月 24 日、プロツキイの生誕 65 周年を記念して開室した（以下、「書斎」と略す）。<sup>7</sup>

筆者が初めてこの「書斎」を訪れたのは同じ 2005 年の 12 月で、開室からおよそ半年がたった頃だったが、展示品が現在よりずっと少なかったことを記憶している。当時の写真によれば、サウスハドレーにあったマホガニー製の大きな書きもの机（いかにもプロツキイ好みらしく円柱がついている）と文房具、派手なアメリカインディアン風のカバーがか

---

<sup>6</sup> アフマトワ博物館創設の経緯などについては、以下の同博物館の資料を元にした。Под кровлей Фонтанного дома : Краткий путеводитель по музею Анны Ахматовой в Фонтанном доме. СПб., 2012. および Истории Фонтанного дома : вместо путеводителя. СПб., 2015.

<sup>7</sup> 「書斎」創設の経緯については、以下の資料を参照した。Американский кабинет Иосифа Бродского : Серия изданий музея Анны Ахматовой. СПб., 2009.

かった一人掛けのソファ、そしてプロツキイが亡命した際に持参した茶色いトランクなどがあった。それから10年以上たった現在では（ニューヨークの自宅にあった遺品も送られてきたためでもあり）展示品がいっそう充実し、二人掛けのソファや本人使用のタイプライター（英語用とロシア語用の1台ずつ）、ヴェネツィアの壁掛け用の図版などが増えている。

圧巻なのは、プロツキイが旅先の世界各国から両親に書き送った絵葉書の展示である。40～50枚はあるだろうか。絵葉書とはいえ一種の「書簡」なので、アーカイヴの規定と同じく文面を読むことは許可されていないが、意外にも親思いのプロツキイの一面が垣間見えて興味深い。



（アフマートワ博物館内の「プロツキイのアメリカ書斎」、2014年3月撮影）

現在、この「書斎」の管理責任者を務めているのは、おそらく60歳前後と思われるボロディナ（Ирина Петровна Бородина）氏であり、他に若手職員のペチェニク（Екатерина Александровна Печеник）氏がいる。その他に、「書斎」の芸術監督としてブイストロフ（Владимир Иванович Быстров）氏という、40代くらいのペテルブルグのアーティストが加わっている。「書斎」にはレコードの針の音が常に鳴り響いているが、これは来客時にレコードをかけてもてなすのが好きだったプロツキイへのオマージュである。つまり、レコードの音楽が終わった後も針だけが溝を回り続けて音を立てるように、プロツキイが故郷レニングラードを去った後も、残響のようにペテルブルグに彼の詩が響き続けることを表現したものだという。

この「書齋」はいわば構想中の「プロツキイ博物館」の前身というべき役割を果たすと同時に、プロツキイに関する啓蒙活動においても重要な役割を担っている。例えば、学童期の子供たちにプロツキイの「小さなタグボートのバラード Баллада о маленьком буксире」という詩をイメージして絵を描かせたり、国内外のプロツキイ研究書の新刊プレゼンテーションを行ったり、プロツキイに関わる新作映画の上映会を開催したりしている。「書齋」の見学ツアーを常時行なっているだけでなく、プロツキイの誕生日である毎年5月24日には、プロツキイにゆかりのある地を訪ねるペテルブルグ市内のツアーなども催している。なかでも注目すべきは、5月頃に限って「プロツキイの市電 Трамвай Бродского」と称するレトロな市電をリテイヌイ大通りに走らせて、市電内部でプロツキイ関連のパフォーマンスを行うという企画である。それと歩調を合わせるかのように、近年リテイヌイ大通りは美しく整備され、レトロな柵や街灯が設置されるようになった。

その他、「書齋」はプロツキイ関連の多くの資料作成に携わっている。なかでも重要なものが、『写真年代記 (Фотолетопись)』と題された3部作である。これは、アフマトワ博物館などが所蔵するプロツキイの写真や資料を編集したビジュアルブックで、その意匠を凝らした造本（写真によってページごとの版型がすべて違うのだ）には驚かされる。第1部は「1940年から1972年まで」すなわちプロツキイの出生から出国までを扱った写真集で、プロツキイの出生証明書や幼少期の貴重な写真などが年代順に並べられている。<sup>8</sup> 第2部は「1972年から1984年まで」すなわち亡命後の壮年のプロツキイが旅行した地域ごとに写真が整理され、しかも訪問した国と年を図示した年表つきというものである。<sup>9</sup> 第3部は「1980年代、1990年代」と題されており、主にプロツキイのノーベル文学賞受賞を中心に構成されている。<sup>10</sup> どれも力作で頭が下がる思いである。

では、肝心のプロツキイの蔵書の所在場所はどこかという点、筆者の知る限り、同博物館の3階の随所に置かれている（2階は主にアフマトワの展示スペースになっている）。おそらく3階はもともとシェレメチェフ伯爵の使用人の部屋だったと思われるのだが、簡素な小部屋がいくつも並んでいて、ちょうど大学の研究室のようである。

蔵書管理は主に、20代の研究員であるセイフェッジーノワ（Ольга Равилевна Сейфетдинова）氏がデジタル機器を駆使して管理している。彼女の部屋（一部屋を2〜3人で共有しているようだ）にはゴルジン氏が持ち込んだプロツキイのソ連時代の蔵書および雑誌があり、他の部屋にはプロツキイ家の遺品がある。蔵書の整理はきちんとされているとは言い難いようだ。もっとも、研究テーマなどの希望を伝えれば、関連する蔵書のリストをメールで送ってもらえる。要するに、書籍のタイトルそのものは電子化されて管

<sup>8</sup> Иосиф Бродский: Фотолетопись. Часть 1. 1940-1972. СПб., Музей Анны Ахматовой. 2012.

<sup>9</sup> Иосиф Бродский: Фотолетопись. Часть 2. 1972-1984. СПб., Музей Анны Ахматовой. 2012.

<sup>10</sup> Иосиф Бродский: Фотолетопись. Часть 3. 1980-е. 1990-е. СПб., Музей Анны Ахматовой. 2013.

理されているのだが、書籍そのものはやや雑然と本棚に置かれている印象で、図書館の書架のような整頓はなされていない。また、後述するように、現在サウスハドレーだけでなくニューヨークのプロツキイ宅からも続々と蔵書が「アフマートワ博物館」に送付されてきているのだが、アメリカ時代のプロツキイの蔵書は廊下にある本棚にやはり雑然と詰め込まれているような状態だった。



(プロツキイのソ連時代の蔵書、2014年3月撮影)

筆者は限られた時間ではあるが、ソ連時代のプロツキイの蔵書を調査してみた。目的の書籍をすべて見つけられたわけではない。ただ、ちょうどプロツキイ作品におけるアメリカの詩人ロバート・フロストの影響を考察している時期だったので、友人アンドレイ・セルゲーエフがサイン入りでプロツキイに送った露訳の『ロバート・フロスト詩集』<sup>11</sup>などを発見できた時は嬉しかった。また、プロツキイは雑誌などに猫などの落書きを書き加えたりして遊んでいる。さらに、プロツキイは所有する本には直接メモを書き込むようなことはせず、表紙の見返し部分などに該当するページ番号をささやかに記入しておくだけだということも判明した。本を汚したくなかったのだろうか。また、他の部屋には生前のプロツキイが気に入っていた「中国船 Джонка」や、シルヴィア・ヴィリンクが製作したプロツキイの胸像（次章で解説する）などが無造作に置かれていた。

さきほども触れたが、未亡人のマリア・プロツキイ氏がニューヨークを去って故国イタ

<sup>11</sup> Роберт Фрост. Избранная лирика: перевод с английского. М., 1968.

リアに帰ることになったため、現在はニューヨークの「終の棲家」からも次々と遺品が送られてきている。筆者は知らなかったのだが、こういった所蔵品はまず洗浄や消毒、燻蒸といった作業が必要なのだそうだ。大きな家具だけでなく小さな置物などもあり、すべてを管理するのはかなり手間がかかりそうである。これらは「プロツキイ博物館」に展示されることを想定して「アフマトワ博物館」が所蔵しているものだが、では「プロツキイ博物館」はいつ開館するのだろうか。次章でそのテーマを扱いたい。

### 3. ペテルブルグのプロツキイ博物館

プロツキイは1955年9月から亡命前の1972年6月までのおよそ17年間の大部分を、リテイヌイ大通りとペステリ通りが交わる場所にある「ムルジ邸 (Дом Мурузи)」の中の「一部屋半 (полторы комнаты)」で両親とともに住んでいた。この「ムルジ邸」は1870年代にアレクサンドル・ムルジ公爵の邸宅として建造され、アルハンブラ宮殿のようにエキゾチックな「ムーア様式」のデザインになっている。かつて19世紀末から20世紀初頭にはメレシコフスキイとギッピウス夫妻が住んでいたこともある。1920年代初頭にニコライ・グミリョフの発案により、この建物内に「ペトログラード詩人の家」が設置された。したがって、もともと文学にゆかりのある建物だといえる。



(プロツキイの実家があった「ムルジ邸」、リテイヌイ大通り側。)

1階外壁にブロツキイの記念プレートがある。2014年3月撮影)

ブロツキイ家の住所は「リテイヌイ大通り 24 番地 28 号室 (Литейный проспект, д.24, кв.28)」となっているが、一家が居住していたのはリテイヌイ大通りの側ではなく、ペステリ通り (Улица Пестеля) の側である。二階のバルコニーのうち、スパソ=プレオブラジェンスキイ大聖堂に最も近いバルコニーがある部屋だ。現在リテイヌイ大通りの側には、ブロツキイが住んでいたことを示す記念プレートが設置されている。ブロツキイの急逝後の最初の誕生日にあたる、1996年5月24日に掲げられたものである。

1999年に、この「ムルジ邸」内に「ブロツキイ博物館」を開館することを目指して「ヨシフ・ブロツキイ博物館創設基金 Фонд создания музея Иосифа Бродского」が設立された (以下、「基金」と略す)。発起人はゴルジン氏と、やはりブロツキイの長年の友人だったミリチク氏である。<sup>12</sup>



(「ムルジ邸」、ペステリ通り側。垂れ幕が掲げられているところがブロツキイ家のバルコニーである。2014年3月撮影)

この「基金」は既に「ムルジ邸」内の教室を確保しており (「一部屋半」を含む)、「プロ

<sup>12</sup> Михаил Исаевич Мильчик (1934年レニングラード生まれ～) は、建築家であると同時に建築物の修復を専門とし、ロシア北部の農村建築の保護などにも取り組んでいる。

ツキイ博物館」の開館のための寄付金集めのため、様々なイベントを開催している。例えば、2013年9月15日にはマーラヤ・サドーヴァヤ通りで路上パフォーマンスを行った。開館を暗示するシンボリックなテープカットが行われた後、主催者のミリチク氏が挨拶し（「ペテルブルグ出身でノーベル文学賞を受賞したのはブロツキイだけです。ですからペテルブルグにはどうしても彼の博物館が必要です」）、モスクワ出身ながらペテルブルグで活躍する若手俳優のパーヴェル・ミハイロフ氏などがブロツキイの詩を暗唱する。他に若手バンドがブロツキイの詩に音楽をつけて演奏など行ったが、日曜日にもかかわらず観客が少ない。常時20~30人程度だったろうか。

さすがに路上イベントでは効果がないと考えたのか、「基金」はついにブロツキイ生誕75周年にあたる2015年5月24日、「ムルジ邸」内で一日限定の「ブロツキイ博物館」をオープンさせた。「書齋」の話では、周囲1ブロックを取り巻く行列ができたという。「おそらく千人以上は来た」そうで、夜中の12時を過ぎても対応に追われたらしい。

もっとも、一日だけの即席博物館だったせいとか、写真を見る限りそれほどの展示物はない。展示は主にソ連時代の写真の類が多かったようだが、フリーの写真ジャーナリストだったブロツキイの父アレクサンドルを記念して、当時の暗室を再現したインスタレーションも設置された。

とはいえ、実際にブロツキイが居住していた「一部屋半」そのものが今回の展示のうち最大の目玉だったといえよう。部屋はまだ修復中とはいえ、アラビア風の華麗なデコレーションが随所になされ、ブロツキイ家のリビングには二つの優雅なアーチが刻まれているのがわかる。住民共同の台所なども展示スペースになっていたようだ。ぜひ一度は入ってみたい建物である。

今回の展示物の中で注目すべきは、第2章で述べた、普段はアフマートワ博物館内に保管されている「ブロツキイの胸像」である。これは、オランダの彫刻家シルヴィア・ヴィリンク (Sylvia Willink) が製作したものであり、以下のような経緯がある。

ブロツキイは1985年6月、オランダ人のロシア文学研究者キース・ヴェルヘイル<sup>13</sup>とともに、ヴェルヘイルの友人アード・ストルーヴェが学芸員を務めているアムステルダム現代美術館を訪れ、2年前に逝去したばかりのオランダの画家アルベルト・カレル・ヴィリンク (Albert Carel Willink, 1900-1983) の絵画を鑑賞して強い衝撃を受けた。なぜなら、ヴィリンクの画風はまさにブロツキイの詩的世界をビジュアル化したようなものだったからである（筆者が写真で確認した限りでは、ヴィリンクの絵は同じフランドル地方のベルギー出身のポール・デルヴォーの作風に似ていると思う。ブロツキイ好みのローマ的な

---

<sup>13</sup> Kees Verheul (ロシア語表記は, Кейс Верхейл) は1940年生まれのおランダのロシア文学研究者で元々はアフマートワを研究していた。1967年よりブロツキイと親交を結ぶ。

廃墟や彫像が、デルヴォー風の幻想的で端正な暗い曇天を背景に描かれているといった趣がある)。



(アフマートワ博物館内の「ブロツキイの胸像」、2014年3月撮影)

ブロツキイはアメリカに帰国してすぐ「カレル・ヴィリンクの展覧会にて (На выставке Карла Вейлинка)」という詩を創作した。その詩に感動した未亡人シルヴィア・ヴィリンクが1991年の夏にブロツキイの胸像を制作したのである。<sup>14</sup>

そして1991年12月15日に、ブロツキイ自身も参加してアムステルダムでこの胸像の除幕式が行われている。その後、国際芸術パトロン同盟によってこの像は買い上げられ、サンクトペテルブルグ市に寄贈されたうえで、1993年3月13日に「アフマートワ博物館」にて胸像の贈呈式が挙行され、現在に至るまで同博物館内に保管されてきたというわけである(ただし、筆者が2014年3月に確認した時点では書棚の上に無造作に置いてあると

<sup>14</sup> 以上の経緯については、次の文献を参考にした。Кейс Верхейл. Танец вокруг мира: Встречи с Иосифом Бродским. СПб., 2014. С. 148-161.

いう程度で、特に覆いも何もなかった。像そのものは冷たいブロンズでありながら不思議にも肉感的な出来で、目には青いガラスが埋め込まれ、美しい仕上がりになっている)。

15

このように、たった一日とはいえ「ブロッスキイ博物館」が試行できたのだから、すぐにも常設博物館ができそうなものだが、どうもことはそう簡単には運ばないようである。現に、2013～2014年にはブロッスキイ家のバルコニーに「ここにブロッスキイ博物館ができる予定」と書かれた垂れ幕が掲げられていたのだが、2016年9月には取り払われていた。むしろ博物館創設の可能性は、以前より遠ざかっているのではないだろうか。

なぜなら、現在のロシアにおいては、ブロッスキイは「あまりにもアメリカ的な」詩人であると思われるふしがあるからだ。例えばモスクワには2011年にノヴィンスキイ並木道(Новинский бульвар)にブロッスキイ像が設置されたが、そこはサドーヴァヤ・カリツォーをはさんでアメリカ大使館の真向かいなのである。像はジャコメッティ風の平板なブロンズ像で、ブロッスキイ一人が大衆から離れて一人超然と虚空を見上げているというものであって、芸術作品としての出来はよくない。

保守的な傾向が増しているロシアにおいて、これほどアメリカ最頂のユダヤ系詩人の個人博物館が、よりもよってプーチン大統領の出身地であるペテルブルグにできる可能性などあるのだろうか。もしできるとしても、ブロッスキイの「アメリカ性」を極力排除した展示になるのではないかと思う。詩人は2020年に生誕80周年を迎えるが、どのような結果に至るのか今後の動向を注視したい。

#### 4. 流刑地のブロッスキイ博物館

ペテルブルグにはブロッスキイの個人博物館はないものの、実はロシア国内において既に「ブロッスキイの家博物館 Дом-музей Иосифа Бродского」は存在する。場所は、アルハンゲリ斯克州コノシャ地区ノリンスカヤ村で、青年時代のブロッスキイが1年半を過ごした流刑地である。

ブロッスキイは1964年2月に「徒食者」という罪状により逮捕され、3月に強制労働5年の判決を受ける(国内外の批判により刑期は短縮され、翌1965年9月には釈放された)。彼はネヴァ川沿いの有名な十字監獄(Кресты)に収監された後、護送車でアルハンゲリ斯克市へ向かい、4月になって犯罪者らとともに劣悪な囚人列車でコノシャ駅に送られたのである(コノシャやニヤンドマといった地区には、囚人用のラーグリが点在していた。た

---

<sup>15</sup> 2013年にゲンナージイ・ノヴィコフ(Геннадий Новиков)監督によって、『ヴィリンクと、さらにもう少し Виллинк и немного больше』と題された30分程度のドキュメンタリー映画が制作された。ブロッスキイとオランダとの関わりを映像化した作品で、「書齋」で視聴可能である。

だしプロツキイはラーゲリに送られたわけではなく、農村に滞在しただけである。<sup>16</sup> プロツキイが居住することになったノリンスカヤ村は、鉄道が通るコノシャ駅から更に東に30キロほど離れたところにある寒村である。<sup>17</sup>

プロツキイは村はずれにあるペステレフ夫妻（Константин Борисович Пестерев と Афанасья Михайловна Пестерева）所有の農家に間借りし、「ダニーロフスキイ Даниловский」という国営農場（ソフホーズ）に所属してジャガイモ栽培などを行なった。村は当時14戸しかなく、電気も通じていなかったという。もっとも都会人のプロツキイに本格的な農作業ができるはずもなく、ありあまる時間の大部分を読書と創作に費やすことができた。したがって、流刑は青年詩人プロツキイにとってむしろプラスの効果をもたらしたのだが、これはまさに皮肉といわなければなるまい。

ノリンスカヤ村でプロツキイが住んでいた家屋は長年放置されていたせいで（家主夫妻は1980年に逝去している）、屋根が崩落するなどなかば廃墟と化していた。<sup>18</sup>ところが、アルハンゲリスク州政府の資金援助によって（おそらく観光客誘致を狙った村おこしのためか）2014年から修復が始まり、詩人の生誕75周年を記念して2015年4月8日に「プロツキイの家博物館」がオープンしたのである（4月8日は、プロツキイがダニーロフスキイ国営農場の構成員となった日だという）。

「書齋」が管理している写真データで見ると、博物館内部は1960年代当時のものらしいさまざまな物品や農具が置かれていて（すべてがプロツキイ使用のものではないだろうが）、往時の流刑をしのばせる。プロツキイが流刑時代に自作詩を掲載してもらった地元新聞『召喚（Призыв）』なども展示されている。希望者には館長自ら見学ツアーを行ってくれるそうなので、機会があればぜひ訪問したいところである（ただし、交通の便はおそろしく悪そうな村だ。宿泊施設はいちおうあるらしい）。建物のわきには、プロツキイが自ら植えたウワミズザクラ（черемуха）の木があるという。

博物館に先立つこと13年前、2002年にはコノシャ駅にプロツキイ流刑を記念するプレートが設置されている。また、2004年には、コノシャ中央地区図書館がプロツキイの名前を冠するようになった（Коношская центральная районная библиотека им. Иосифа Бродского）。

<sup>16</sup> 詳しくは、*Волков С.* Диалоги с Иосифом Бродским. М., 1998. С. 81-89.

<sup>17</sup> 今回の調査で新たに判明したことだが、「コノシャ Коноша」という地区名は最初の「о」にアクセントがあるため「コーナシャ」という発音になる。また、「ノリンスカヤ Норинская」という村名は最初の「о」にアクセントがあるため、「ノーリンスカヤ」と発音する。プロツキイは村名をなぜか「Норенская」と綴るのが常だが、友人たちには「どうせ同じ発音だ」と弁解していたという。

<sup>18</sup> 廃墟と化していた家屋の写真については、以下の文献に多数の写真つきで紹介されているので参照されたい。*Мильчик М.И.* Иосиф Бродский в ссылке: Норенская и Коноша Архангельской области. СПб., 2013.

<sup>19</sup> この図書館内には、2014年11月18日から「ノレンスカヤ村でのヨシフ・ブロツキイ Иосиф Бродский в Норенской」と題したインスタレーションが展示されているという。家主のペステレフ宅に保管されていた家具を飾っているだけでなく、「詩的な結晶 Поэтический кристалл」というスペースが確保してある。そこには、透明なアクリル板で巨大な四角錐をかたどった空間が作られ、背後には灰色の壁がある（ブロツキイは「灰色」を「時間の色」と見なして好んでいた）。壁には四角い窓がうがたれ、ブロツキイと交流のあった村人の写真がはめこまれている。その脇には、灰色のシルエットでできたブロツキイ像もあり、心臓のかたちにくりぬかれたスペースにノレンスカヤ村の風景が映し出され、ブロツキイが村を扱った自作詩を朗読する音声がエンドレスで流れる。この展示品を担当したのは、ペテルブルグの「書齋」と同じくブイストロフ氏だという。

なお、「書齋」もこの図書館と協力して、2015年に「天使郵便 Ангелопочта」という大がかりなイベントを行った。電子メールしか知らない現代の子供たちをコノシャにまで連れていき、そこから「書齋」にあてて手書きの手紙を送るという体験をさせたのだという。なお、この名称自体はブロツキイの命名による。

実は筆者にとっては全くの初耳だったが、ブロツキイは1962～1963年(22～23歳)頃、アフマトワの紹介によりフォルマリストでプーシキン学者のボリス・トマシェフスキイ(Борис Виктрович Томашевский)宅を訪れるようになった。トマシェフスキイ家は豊富な蔵書を所有していることで有名だったという。ブロツキイはそこで、当時8歳だったボリスの孫娘ナースチャ・トマシェフスカヤ(Настя Томашевская)と親しくなる。一家は黒海沿岸にあるグルズフで新年を迎えるのが恒例であり、ブロツキイも招かれたことがある。

その後、流刑判決を受けたブロツキイはノレンスカヤ村で過ごすことになり、幼いナースチャに対してカラフルな絵手紙を何通も書き送った。ブロツキイは手紙の中で自らを「ハン＝ユスフ(Хан-Юсуф)」と称し、南方の海岸に寝そべるアラビア人風の自画像のイラストにコミカルな児童詩を添えるなどして、少女を喜ばせようとした。このナースチャに送った絵手紙を、ブロツキイは「天使郵便」と名づけたのである。二人の文通は、その後30年以上にもわたって続いた。トマシェフスカヤは現在もペテルブルグで存命中だという(以上の情報はすべて「書齋」からの提供による)。

この往復書簡はブロツキイ研究において重要な意味を持つと思うのだが、ロシアでまとまった形で出版される見込みは薄いかもしれない。近年までこの資料を保管していたのはリトアニア人のラムナス・カティリウス(Ramunas Katilius)氏だった。<sup>20</sup> なぜカティリウス

<sup>19</sup> 500 мест русского севера, которые нужно увидеть: путеводитель. М., 2013. С. 280-282.

<sup>20</sup> Рамунас Катилиус (1935年リトアニアのカウナス生まれ～2014年ビリニウス没)は理論物理学者で、レニングラードの科学アカデミー半導体研究所で研究していた1966年よりブロツキイと親交

ス氏が「天使郵便」を所蔵していたのかは不明だが、2014年に彼が死去した後に同資料はロシアではなく、アメリカのスタンフォード大学に寄贈されたのだという（スタンフォード大学には2013年よりブロツキイのアーカイヴが設置されており、カティリュス氏以外の人物からも資料が提供されつつある）。現在「書斎」はこの書簡の電子データのみを保管しているが、ぜひ書籍という形で上梓してもらいたいものである。

ノリンスカヤ村から話がそれてしまったが、このようにブロツキイに関してははまだ知られていない事実が数多く残っている。史料発掘の今後の展開を期待することにした。

## 5. ブロツキイの家族

今回の現地調査等を通じて、ブロツキイの家族についての知られざる情報も得ることができた。研究に役立つと思われる情報を記しておきたい。

これまで筆者は、ブロツキイの実家にいろいろと日本にまつわる物品があったのは、ブロツキイの父アレクサンドルが海軍軍人時代に中国戦線で入手したものに違いないと思いついてきた。例えば、「書斎」が保管している「一部屋半」のモノクロ写真には、棚の上に日本のいわゆる「茶箱」のようなものが映っている。また、少年時代のブロツキイがいたく気に入っていたという「中国船 *джонка*」は、実際は日本製の「宝船」なのかもしれない（ブロンズ製のこの船は、四角い帆の部分に旧漢字で「寶」と彫りこまれている精巧なものである）。ブロツキイ自身の回想によれば、「敗戦国日本」からの「戦利品」として、アレクサンドルは大量のレコードも持ち帰ったのだという。<sup>21</sup>

しかし、これらの品々はどうやらアレクサンドルがソ連軍の満州侵攻の際に手に入れたものとは限らないようだ。近年出版された書籍によると、当時42歳のアレクサンドルは1945年から1946年にかけて敗戦直後の日本に滞在していたとのことである（神社の前で神主や住人たちと撮影した写真が残っている）。ブロツキイ家にはアレクサンドルが持ち帰った「武者人形」や「芸者人形」があったのだという。<sup>22</sup> 当時来日したソ連の軍人は比較的少数だったと思われる。いずれアレクサンドルの行程が判明し、ブロツキイ家と日本との意外な接点が見出されるかもしれない。

続いて、ブロツキイの子孫についても述べておきたい。ブロツキイには現在3人の子供と5人の孫がいる。

ブロツキイが1962年に知り合い、生涯にわたって多数の詩を献呈することになった女性は、絵本作家としても知られる画家マリーナ・パーヴロヴナ・バスマノワ（Марина

を結んでいた。詳細は、Рамунас Катилюс (сост.), Иосиф Бродский и Литва. СПб., 2015. С. 17-169.

<sup>21</sup> Joseph Brodsky, *On Grief and Reason* (London: Penguin Books, 1995), pp. 16-17.

<sup>22</sup> Кельмович М.Я. Иосиф Бродский и его семья. М., 2015. С. 99.

Павловна Басманова) である。マリーナは 1967 年 10 月 8 日にブロツキイの息子アンドレイ (Андрей Осипович Басманов) を産んだ。しかし、彼女は当時ブロツキイの友人でもある詩人のドミートリイ・ボブシシェフとも交際しており、どちらが父親なのか不明だったこともあって、ブロツキイをアンドレイの父親として認めることを拒絶した。1972 年にブロツキイが出国したあと、アンドレイは母マリーナとソ連に残る。ペレストロイカ時代の 1990 年になって、50 歳になったブロツキイと 23 歳のアンドレイはニューヨークで再会を果たすことができた。しかし、ブロツキイも認めざるを得なかったように、<sup>23</sup> アンドレイは父親の詩的才能を受け継ぐことはなかった。今もペテルブルグに住むアンドレイは現在 49 歳だが、「書齋」などの行うブロツキイ関連のイベントにはほとんど顔を出すことはないという。

かわりにバスマノフ家の代表として活動しているのはアンドレイの妻、リンマ・シピナ＝バスマノワ (Римма Щипина-Басманова) である。シベリアのクラスノヤルスクからペテルブルグへ上京してきたリンマは、美術アカデミーに入学した。そこで教鞭を取っていたのが、マリーナ・バスマノワの父親にあたる画家パーヴェル・バスマノフ (Павел Иванович Басманов) だという。リンマはパーヴェルの孫であるアンドレイと後に結婚することになるが、最初のうちはアンドレイが詩人ブロツキイの息子であることを知らなかった。現在、彼らの間には 3 人の娘がいる。ブロツキイ関連のイベントではリンマが中心になって活躍し、詩人の孫にあたる三姉妹がそれに協力している。

次に、あまり知られていないことだが、ブロツキイにはソ連時代にもう一人子供がいた。マリーナと別れたブロツキイはキーロフ劇場 (現在のマリインスキ劇場) のバレリーナであるマリアンナ・ペトローヴナ・クズネツォワ (Марианна Петровна Кузнецова) と交際し、1972 年 3 月 31 日にマリアンナとの間に娘アナスタシア (Анастасия Иосифовна Кузнецова) が生まれた。実に、ブロツキイがソ連を永久に出国することになる 2 カ月半前だった。ブロツキイがなぜかこの事実を伏せていたこともあり、ブロツキイの生前にアナスタシアの存在を知る人はごく少数だった (ポルーヒナによれば、亡命後のブロツキイはバレエダンサーのミハイル・バリシニコフを通じてクズネツォワ親子に経済的援助を行っていたという)。結局、アナスタシアは父親であるブロツキイに会うことは一度も叶わなかった。<sup>24</sup>

アナスタシアは学齢期から英語専門特殊学校に通学し (アメリカに住んでいるブロツキイに会いに行かせようと母親が考えたのか)、ペテルブルグ教育大学を卒業して英語通訳になった。ブロツキイ研究の第一人者であるヴァレンチナ・ポルーヒナの助手を務めてい

<sup>23</sup> Полухина В. Интервью с Риммой Щипиной-Басмановой // Иосиф Бродский глазами современников (2006-2009). СПб., 2010. С. 134.

<sup>24</sup> Полухина. Интервью с Анастасией Кузнецовой. С. 121-131.

るだけでなく、英語で執筆されたブロッツキイ作品のロシア語訳も数多く手がける。彼女は現在もペテルブルグに住み、一人息子を育てている。「書齋」に来ることはほとんどないが、ブロッツキイの遺伝なのか、息子は既に詩作を行なっているという。

このクズネツォワ親子については筆者も最近ようやく知ったのだが、従来の研究上の思い込みをいろいろと訂正しなくてははいけないはめになった。例えば、ブロッツキイのエッセイ「一部屋半」に登場する「マリアンナ」という女性<sup>25</sup>のことを、これまでマリーナ・バスマノワの愛称だと考えていたのだが、他に「マリアンナ」という恋人がいたのなら話が変わってくる。また、ブロッツキイは亡命後の作品中に喪失した「息子」のモチーフは多用するが、「娘」のモチーフは出してこない。何か創作上の理由でもあるのだろうか。

最後に、ブロッツキイの亡命後に生まれた子供について記す。

1990年1月、パリの高等師範学校で行われたブロッツキイの「詩の夕べ」において、当時50歳になっていたブロッツキイは年若い女性マリア・ソツァーニ (Maria Sozzani) と知り合う。マリアは父親こそイタリア人だが、母親は亡命ロシア人の血をひいており、おそらくトルベツコイ公爵家の末裔だと思われる。<sup>26</sup>

その後、ブロッツキイとマリアは同年9月1日にストックホルムで結婚式を挙げた(ブロッツキイが「正式に」結婚したのは、これが最初で最後である)。1993年6月9日に、二人の間に娘アンナ・マリア・アレクサンドラ (Anna Мария Александра Бродская) が誕生した。彼女の名はアンナ・アフマートワ、ブロッツキイの母親マリア、父親アレクサンドルの3人の名前を連ねたものだという。なお、ブロッツキイの子供3人全員の名がすべて「A」から始まる理由は不明である。

アンナが3歳にも満たない1996年1月にブロッツキイは急逝し、遺された親子はブロッツキイが亡くなったニューヨークのアパートで2014年まで暮らしていた(現在、マリア夫人は両親の介護のためイタリアに帰国している)。夫人のインタビューが全く存在しないため詳しい経緯は不明なのだが、23歳になった娘アンナは現在「Anna Brodsky」という英語詩人として活動している模様である。髪を赤く染めているものの顔立ちはブロッツキイにそっくりであり、3人の子供のうち最も顕著に父親から容貌や性格を受け継いでいるようだ。なお、彼女は若くしてパートナーとの間に娘をもうけている。したがって、ブロッツキイの孫は計5人(男1人、女4人)となる。

2015年5月24日、ブロッツキイの生誕75周年を記念するイベントにアンドレイ、アナスタシア、アンナは一同に会した。母親はそれぞれ違うものの、3人が仲良く肩を寄せ合っている写真は微笑ましいものだった。いつの日か彼らがそれぞれブロッツキイに関する回

<sup>25</sup> Joseph Brodsky, *Less Than One* (London: Penguin Books, 1986), p. 476.

<sup>26</sup> Полухина В. Иосиф Бродский: Жизнь, труды, эпоха. СПб., 2008. С. 381.

顧録を執筆することを期待したいものである。

## 6. 結びにかえて

今年 2016 年は、プロツキイの没後 20 年にあたる。本文中でくりかえし述べたように昨年の 2015 年が生誕 75 周年として大々的に祝われただけに、今年は目立った大イベントはなかったようだ。しかし、没後 20 年が経過するというのに、ロシアにおけるプロツキイ人気は衰えることがないようである。例えば、価格が 5000 ルーブル近くもするプロツキイ詩集セットの豪華版が昨年出版されたが、<sup>27</sup> 発行部数は 3000 部にも及ぶ。根強いファンが沢山いるらしい。

その反面、プロツキイ研究はまだ未知の領域が多く残っている。プロツキイ本人のアーカイヴにしても、ロシア国立図書館（РНБ）、イエール大学、スタンフォード大学の 3 ヶ所に分散しているだけではない。プロツキイの初期詩篇を収集し地下出版したことで知られるウラジーミル・マラムジン（Владимир Рафаилович Марамзин）氏のアーカイヴはドイツのブレーメン大学附属の東欧研究センターにあってアクセスは容易ではない。そもそもプロツキイの総テキストの全容すらいまだにつかめていない状況なのだが、今後も地道に調査を続けることで少しでもプロツキイ研究を前に進めていきたいと考えている。

---

<sup>27</sup> К юбилею поэта, 75 лет со дня рождения Иосифа Бродского. СПб., 2015. 内容は、『荒野の停留所 Остановка в пустыне』、『美しい時代の終焉 Конец прекрасной эпохи』、『言葉の一部分 Часть речи』、『オーガスタに寄す新しい詩 Новые стансы к Августе』、『ウラニア Урания』、『洪水のある風景 Пейзаж с наводнением』という 6 冊の詩集のセットである。